

推しを味方につけたら
最強だって知ってましたか？

シンシア

リオノーラの侍女。
公爵邸で孤独に過ごす
リオノーラにとって
母親代わりの唯一の味方。

ゾイ

国で有名な
ドレスブランドのデザイナー。
精霊との契約者でもある。
実は正体は……

デリック・エレメンタル・
ニーシュライナー

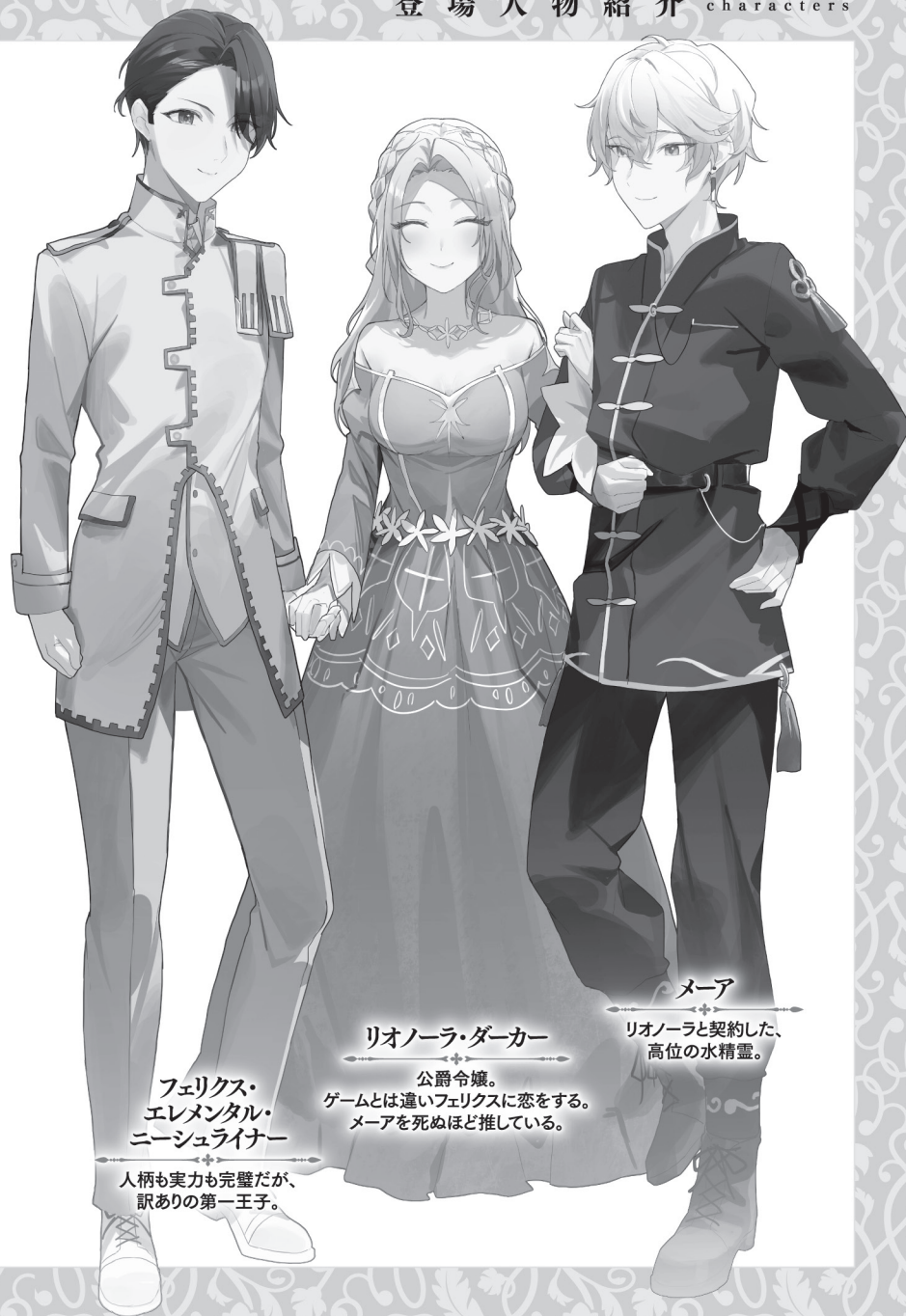
フェリクスの異母弟である王子。
元のゲームでのリオノーラが
恋をした相手。

ユーリン・エレメンタル・
ニーシュライナー

フェリクスの異母弟である王子。
デリックとは双子の兄弟。

スフレ・ダーカー

リオノーラの妹。
元のゲームでの主人公。
天真爛漫で誰からも好かれる性格。



リオノーラ・ダーカー

公爵令嬢。
ゲームとは違いフェリクスに恋をする。
メアを死ぬほど推している。

メア

リオノーラと契約した、
高位の水精霊。

フェリクス・
エレメンタル・
ニーシュライナー

人柄も実力も完璧だが、
訳ありの第一王子。

一章 荒れ狂う風

——精霊に守られている国、ニーシュライナー王国。

そこには悲しい目をした王子と彼の異母弟である双子の王子がいた。第一王子の名前はフェリクス・エレメンタル・ニーシュライナー、双子の王子の名前はデリックとユーリン、とある理由で第二王子であるデリックが王位を継承する事となっていた。

そんなデリックの婚約者である公爵令嬢、リオノーラ・ダーカーは火の精霊にとっても愛されていた。輝く星のような金色の髪とガーネット色の瞳は、男女問わず魅了する。しかし性格は傲慢で、リオノーラの我儘に堪えかねたほとんどの侍女は一カ月と保たずに逃げ出してしまう。

リオノーラが婚約者候補となったのは、彼女とデリックが十歳の時だ。自分の婚約者に相応しいのはデリックだと思い込んでいたリオノーラは、嫌がるデリックを気にする事なく、強引に関係を推し進めていく。

転機はその一年後、リオノーラは、離れて暮らしていた母のアーリン、妹のスフレと共に暮らす事となった。今日から家族四人で暮らすのだと、嬉しそうに父から伝えられたリオノーラは、母親と父親の愛情を独り占めしていたスフレがどうしても許せず、妹のスフレを虐^{しいた}げていた。

そして王家主催のお茶会に招待された時、リオノーラに嫌がらせをされて汚れたドレスでの出席となったスフレは、会場から少し離れた噴水にあるベンチに座って静かに涙を流していた。リオノーラに付きまとわれて疲れ果てたデリックは、そこでスフレと出会い、可憐さに心奪われる。デリックは、徐々にスフレに惹かれ、二人の恋は燃え上がってしまう。

それを知ったリオノーラの嫌がらせや虐めが激化していき、ついにはリオノーラに脅されて下僕のように動いていたユーリンが作った薬でスフレは昏睡状態に陥る。

スフレが水の精霊と契約していたため、彼女が眠ってから、雨が降り続き水害が起こる寸前となった。デリックが弟を懸命に論じたことで、ユーリンが涙を流しながら今までの経緯を話し、デリックに解毒薬を渡す。

悪事がバレたリオノーラはスフレを貶めた罪と王族であるユーリンを脅した罪で断罪される事となる。

「……呪ってやるッ！」

と、叫びながら火炙りにされるリオノーラは迫力満点だった。まるで実際に見たかのように語れるが、これはゲームの記憶である。

そしてリオノーラの呪いにより……と物語はゲームの続編へと続いていくのだが、ここである事に気づく。

(そのリオノーラって……私じゃああああんッ!!)

「——いやあああッ!!」

「リ、リオノーラお嬢様？」

高橋莉子、アラサーオタクの会社員だった。平日は朝起きて、支度して、仕事に行って、寝る前に推しを目に焼きつける。休日は朝起きて、推しを見て、推しを見て、たまに友達と遊びに行つて推しについて語り明かし、コンサートという一大イベントのために己を磨く。そんな、現実とは干からびつつも、心は潤う慎ましくも素晴らしい生活を送っていたはずなのに、一体何を間違えたら、乙女ゲームの悪役令嬢になっているのだろうか。

(……リオノーラ・ダーカー、火の精霊に愛されていた悪役令嬢)

じんわりと思い出しながら脳内にある記憶を辿る。目の前にいるシンシアはリオノーラにとって唯一の味方だった侍女だ。

「どうしたのですか!? 今日ば殿下達との顔合わせの日ですよ？」

「ごめんなさい聞き間違いかしらもう一度言ってくださいなううッ!?」

「き、今日は、顔合わせの日ですう……」

ガバッと起き上がり、息継ぎなしに言いきったためか、シンシアはこちらの勢いに怯えた様子で答えた。

という事は現在リオノーラは十歳で、一年後には妹のスフレを虐げるといふ事だろう。

顔合わせに行きたくなって、リオノーラは必死に抵抗したのだが、突然現れた父親のジョントによって阻まれてしまい、あれよあれよという間に準備が進んでいく。侍女の一人が持ってきた、赤い布地に白のリボンとフリルで胃もたれしそうな派手派手しいドレスを見て驚愕し、そのドレ

スを着たくない駄々を捏ねた。髪もストレートでシンプルがいいと泣きながら訴えかける。そしてクロゼットの奥の奥に仕舞い込んでいた大きめの箱を取り出し、シンプルで品のある薄紫色のドレスを着る事に成功した。

「大変お待たせいたしました……お初にお目にかかります。フェリクス殿下、デリック殿下、ユーリン殿下。わたくしはリオノーラ・ダーカーと申します。ようこそお越しくださいました」

やる気のない声と裏腹に、見事なカーテシーを披露したリオノーラに、驚いたのはリオノーラ自身である。どうやら体に染み付いた所作とは、簡単には消えないようだ。

公爵令嬢として恥ずかしくないようにと、幼い頃から毎日毎日……厳しい講師達に指導を受けているリオノーラにとっては朝飯前である。

「はじめまして、リオノーラ嬢。僕はフェリクス。そして弟のデリックとユーリンだ」

「デリックだ。よろしく」

「……………よろしく」

目の前の第一王子の美しさと双子の王子達の可愛らしさにゴクリと生唾を飲み込む。しかし、一目惚れでは断じてない。悪役令嬢であるリオノーラは、この時点でデリックに恋をしなければならぬのだろうが、こんな可愛らしい幼気な少年に恋をする気になどとてもなれなかった。

それに莉子の時は砂漠のように乾いていたので、もう男なんて正直どうでもいいのだ。推しがいればなんの問題もない。父達の会話を聞き流しながら、莉子だった時、最推しだったアイドルの姿を思い浮かべる。

銀髪で癖毛で顔が男性とは思えないくらい神々しくて美しく、いつもは素っ気ないが、たまに見せてくれる笑顔がとっても素敵で可愛くて推せるのだ。基本的には紳士で、時々茶目っ気があるところもすべてが最高なのである。

そういえばそもそもデリックに好き好きアピールをしなければ婚約者にならなくても済むのではないか、という考えは次の父の言葉で掻き消された。

「リオノーラはデリック殿下と会う事をそれらもうとても楽しみにしておりました。是非とも婚約者として前向きに……」

「ストップ、お父様ストップ!!」

「リオノーラ、何を!?」

父の服の裾をギューンと引っ張りながら、リオノーラはガタガタと震えた。婚約者にならない事が目的であるというのに、思わぬ邪魔が入ったようだ。確かに『リオノーラ』は王妃になりたいと強く思っていた。けれどそれは昨日までの話であって今日は違う。

「お父様、こちらにいらしてください……!」

父の腕を引き、そっと耳打ちする。

「わたくしは王妃の座を諦めます! それよりも、ひとつ確認したいのですが、ダーカー公爵家の娘であれば、婚約者候補は妹のスフレでもよいのですか!?」

「リオノーラ、一体どうしたんだ!?」

「乙女心は複雑なんです!!」

「……………は？」

「わたくし、スフレを推薦してもいいですか？」

「……スフレを？ 何を言ってるんだ」

「将来きつと良い子になりますわ！ オホホホ!!」

むしろ良い子に育ってくれないと困るのだ。ゲームどおりのスフレなら可愛らしく性格もいいので申し分ないだろう。尚も追求しようとする父を追い出して、リオノーラは一息付いてから表情を切り替える。そもそもはじめからヒロインと攻略対象者がくっつけば悪役令嬢は必要ない。あとはリオノーラがスフレを虐めなければ問題ない。悪役令嬢問題は万事解決である。

「……という事で、わたくしは妹のスフレを推薦いたしますわ」

「……えっと」

「きつと殿下達はスフレを好きになると思います!!」

「リオノーラ嬢……？」

「きつと可愛い子に育ちます。言いけますわ!」

戸惑うデリックとユーリンを気にすることなくリオノーラは力強く訴えかける。

「……………」

「……………」

「なんかこう……いい感じになるような気がするのです!」

これ以上、スフレをおすすめする言葉は思いつかない。当然といえば当然だった。

「会った事ないって、公爵から聞いたけど……？」

「何か……訳が？」

「……うっ!」

デリックとユーリンは痛いところを突いてくる。そう、この時点でのリオノーラはスフレに一度も会った事がないのだ。祖母と叔母が、別邸で暮らす母と病弱なスフレの事が気に入らず、いつもリオノーラの前で二人の文句を言っていた事を思い出す。

「そんなに、僕達の事は気に入りませんか……？」

第一王子のフェリクスは困ったように笑いながらリオノーラを見ていた。色気を孕^はんだ優しい瞳にクラクラしてしまう。どうして乙女ゲームに出てくる王子達はこんなにもイケメンなのだろうか。

「そんなに……拒否しないで」

「……ユーリン殿下」

「リオノーラ嬢……答えを決めるのはお互いを、もう少し知ってからでもいいんじゃないかな？」

「デリック殿下……」

三人の困惑した表情に心はチクチクと罪悪感という名の針で刺されていた。よく知っているのは三人が成長した姿であり、やはり目の前にいるのはただの子供なのだ。リオノーラは先走りすぎたと反省して肩をすくめた。

「申し訳ございません……」

「まだ婚約者になるわけではないから気楽に……ね？」

「フェリクス殿下……ありがとうございます」

そして、あつという間に時は過ぎ、王子達が帰る時間となる。デリックとユーリンは帰りの馬車に乗り込んだ。

（やっと終わった……！ 危機が去っていくわ）

笑顔で手を振りながら馬車を送り出そうとすると、フェリクスが二言三言話しかけてくれた。

落ち着いて話してみると、フェリクスはニーシュライナー国王にとってもよく似ているような気がした。瑠璃色の髪と、常に優しい笑みを浮かべ落ち着いた雰囲気は漂っていると、そこがそっくりだ。どこか寂しそうな青藍の瞳を思わず見つめてしまう。

「そんなに見つめられると照れるね」

「はっ……！ ご、ごめんなさい。その、すごく美しかったので」

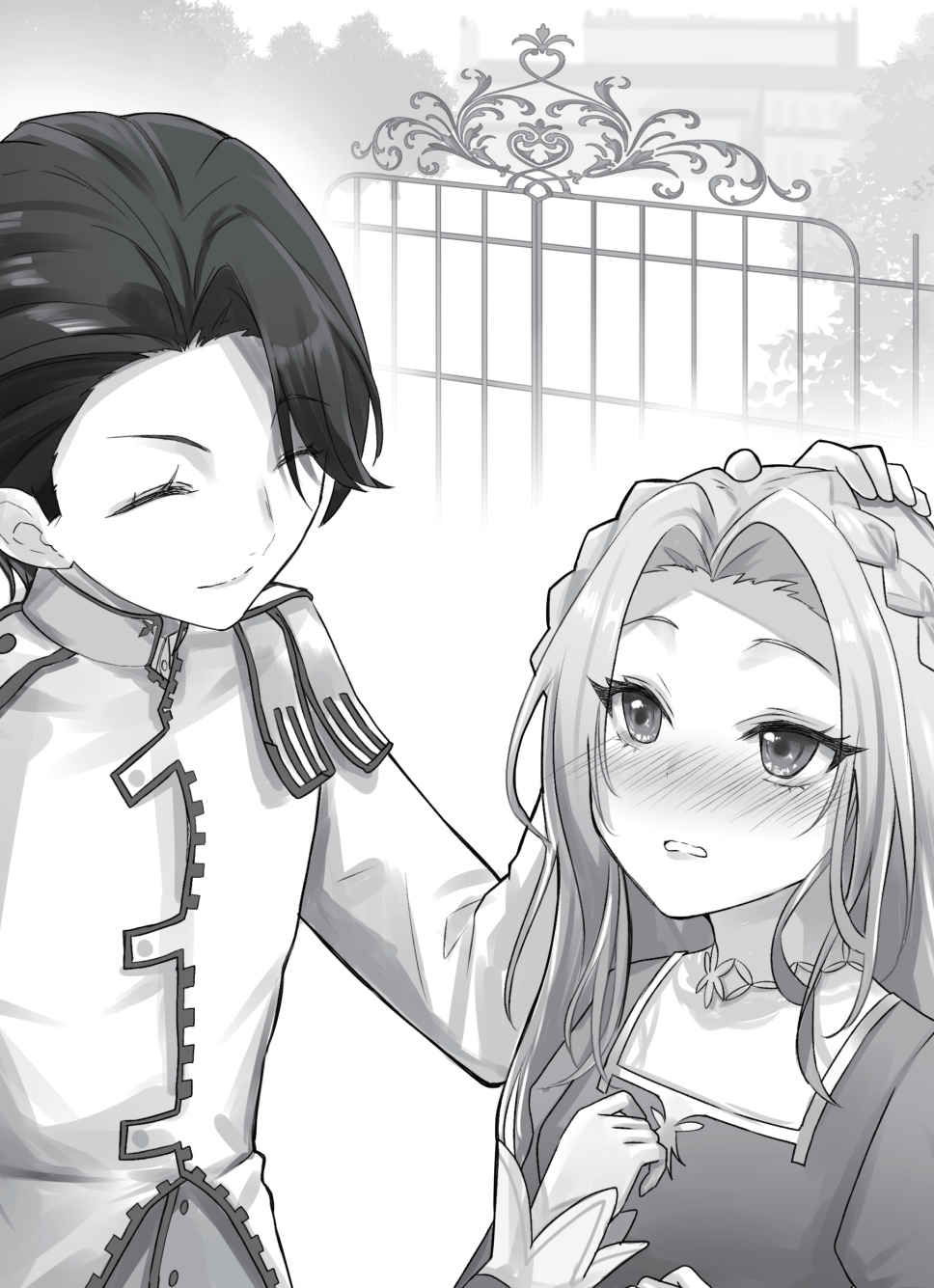
「あはは、ありがとうございます。面白い子だね」

「……っ！」

不意打ちの笑顔に胸キュンである。フェリクスはリオノーラの二つ上で、病で命を落とした前王妃の息子だった。跡を継ぐのは本来第一王子であるフェリクスだが、複雑な事情がありデリックが王位につく事になっているそうだとすることはゲームでも軽く説明されるので当然知っている。しかし、改めて本人と向き合うと一体何の事情があるのだろうかと思ってしまう。

「……リオノーラって、呼んでもいいかな」

「は、はい！ もちろんです」



「今日はごめんね」

「え……？」

「あんまり気が進まないようだったから。疲れただろう？」

リオノーラの気持ちを汲みとり、氣遣ってくれるフェリクスに感動していた。心配になるくらい、フェリクスは大人びて見えた。

「いえ……こちらこそ気を遣わせてしまつて、申し訳ございません」

「リオノーラ嬢は……噂とは、だいぶ違うんだね」

「それは……あのつ、今日から心を入れ替えようと思ったのです！」

「そうなんだね。頑張つて」

なんとか表情を取り繕いながら答えると、フェリクスは納得したように頷いて、言葉を続けた。

「でも、無理はしないようにね」

「……………！」

フェリクスはそう言つてにつこりと笑つた。その笑顔に心を揺さぶられる。もつとフェリクスと話したい……そう思つた時だった。

「フェリ兄、まだ？」

デリックが外に少しだけ身を乗り出して声を上げた。

「ああ、今行くよ。リオノーラ嬢……また会えたら話そうね」

「あ……………はい」

リオノーラは放心状態で馬車を見送つた。頭はフェリクスの事でいっぱいになっていた。

(とても寂しそうな目をしてた。どうしてだろう……)

まさかの、デリックではなくフェリクスに惹かれてしまった。リオノーラは考えを振り払うように首を横に振つて、気合を入れるためにパンパンと頬を叩く。ひとまず、これで物語のシナリオから抜け出す一歩は踏み出せただろう。ここからだ。

次の日、あまりにも派手なドレスしかクローゼットになかつたため、父にシンプルなドレスがほしいと願っていると「またか」という言葉とともに仕方なしに了承してくれた。その時、リオノーラは初めて父を買い物に誘つたのだと気づいた。今まではドレスをねだつても、面倒だとはかりに適当に買ったものを与えられるばかりだったのだ。ブティックに向かい、ドレスを選びはじめるまではよかったが……

「——お父様！ それは派手過ぎですわ！」

「このくらい普通だろう？」

「それなら今あるものと変わりません」

「シンプルで可愛いものと言うからだな……」

父との間に火花が散る。一触即発の雰囲気到店員も困り顔だ。

その時、チリンチリンと店のベルが鳴り、周囲が騒めき始める。豪華なドアから入ってきたのはスレンダーで美しい女性だった。横には黒豹が優雅に歩いている。

「……この世界は黒豹がペットなの!? ゲームでそんな設定あったっけ!?」
そして目の前で足がピタリと止まる。

「久しぶりね」

「……なぜここに」

「あら、ここは私の店よ。知っているでしょう?」

父が顔を顰^{しか}めている理由が分からずに首を傾げると、女性はクスクスと笑っていた。

「……可愛いお嬢さんね、お名前は?」

「は、はい! お初にお目にかかります。わたくしはリオノーラ・ダーカーです」

慌てて挨拶をすると、女性は優しく微笑んだ。

「私は……そうね、ゾイと呼んでちょうだい」

「はい、ゾイ様」

「おいっ! 何を考えているんだ」

「ジョンテ……あなたは奥で待っていて」

「なっ……!」

女性の指示で店員が現れる。案内されて、渋々ついていく父の姿を見送った。公爵家の当主である父を簡単にあしらえるほどだ、もしかしたら身分がとても高いのではないか、とリオノーラは悟る。それに二人はとても親しい間柄のように思えた。

「私は……このデザイナーのようなものよ」

「そうなのですね! どのドレスもとても素敵です」

「ふふ、ありがとう」

ゾイの真つ赤な唇が弧を描く。妖艶な表情に同性でもドキドキしてしまう。

「どんなドレスを探しているのかしら?」

「えっと、シンプルで綺麗なシルエットのドレスを……」

「それならこの辺はどうかしら?」

上半身は体に合う綺麗なラインで、スカートの部分はふんわりとした形のドレスをいくつか出してくれた。裾にレースと刺繍がバランスよく組み合わさっていてパステルカラーで優しい印象である。ゾイが持つてきてくれるドレスは、どれも求めているものばかりだった。

そこからいくつか選んで父に渡すと、意外そうな顔をされた。

「リオノーラ、ドレスを全部替えたいと言っていたじゃないか。買いたいのはそれだけか……?」

「はい。これだけで十分ですわ! ありがとうございます。お父様」

「本当に、リオノーラだよな……?」

父の横でゾイも黙ったままりオノーラの方をジッと見ている。

「え……!? もしかして今までのリオノーラとは違いすぎて疑われている!?」

「ま、まっ、また買い物に行く楽しみが出来ますしね。か、可愛いドレス嬉しいですわ! うふふ」

ドレスを持ち、子供らしくクルクルと回りながら適当に誤魔化していると、ゾイは真剣な顔をし

て父に問いかけた。

「……アーリンは、まだ本邸に戻らないの？」

「ああ……」

「そう……。リオノーラ、よかったらまた私と一緒にドレスを選ばない？」

「本当ですか!? 是非お願いします!」

母の名前まで出てくるとなると、ますますゾイは何者か気になってしまふ。しかし、今聞いていることではないだろう。

父が会計している間、ゾイとたわいない話をしていた。

「私もゾイ様のように美しくなりたいです」

「あら……嬉しいわ。ありがとう」

「このドレスが似合うように頑張って努力します」

「それは、とても楽しみだわ」

従者が購入したドレスの箱を持ち、ゾイの店を後にした。

公爵邸に帰るとシンシアが笑顔で迎えてくれた。莉子としては昨日会ったばかりにもかかわらず思わずほっとできるほど、シンシアの側は唯一、安心出来る場所だった。リオノーラにとってシンシアの存在が支えなのだと心から思う。ずっとシンシアがリオノーラの母親代わりだった。性格が歪み我儘放題だったリオノーラだが、シンシアだけは何があっても最後まで寄り添い続けてくれたのだ。

「これ、今日お父様に買ってもらったドレスなの」

「まあ、ヴィーナスのドレス……! 素敵ですね」

「今までのドレスはすべて要らないわ。そうね……これとこれ以外は申し訳ないけど処分をお願いできる?」

「えっ!? 本当にいいのですか? お嬢様のお気に入りのドレスばかりなのに……」

「もういいの……お願い」

「……………お嬢様」

「この宝石も売りに出して、自分の好きなアクセサリーを買いたい。お父様に許可はとつてあるわ」

ギラギラと自己主張の強い宝石達はまるで『自分を見てほしい』と強く願うリオノーラの心の中を表しているような気がした。

広々としたクローゼットを見て清々^{すがすが}しい気持ちになる。今度はヴィーナスのドレスを着て、ゾイにお礼をしに行こうと考えながら眠りについた。

莉子がリオノーラになってからしばらく経つが、一向に元の世界に帰れる気配はない。これは異世界転生で確定だろうと受け入れる。子供には虐待同然の教育の日々も、アラサーの記憶で乗り越えられる。今日はよく晴れた日だった。超スパルタな講師達と闘ったリオノーラは疲れを癒すためにのんびりと池を覗いていた。

『……何してるの?』

誰かに声をかけられて顔を上げると、銀髪で癖毛で、推しにそっくりな男の子が目の前に立っていた。いわば推しの子供バージョンで大変可愛らしい。

(推しがあ……! 推しが目の前に現れたッ!?)

感激に涙が出てきそうになり、夢かもしれないと頬を思いきりつねるがとても痛い。やはりここは現実のようだ。

『僕の声、聞こえているよね?』

「……………」

『ねえってば……!』

「はい!! 聞こえてますッ」

瞬きするのも惜しい。目が乾いて血走ったとしても、この姿を一秒でも長く目に焼きつけなければならぬ。

(これは頑張ったりオノノラへの神様の贈り物よ。はあああああ、尊い……!)

あまりの興奮に心臓が握り潰されそうになり胸を押さえた。

『君さ……大丈夫?』

「んふー……可愛い……えへ。やつぱり大好き!」

『好き……? 僕の事が好きなの!?』

「もう本当に素晴らしっ……ずっとずっと大好きです」

『ずっと……!? 本当に?』

「当然!」

『そんなに僕の事を好きだったら、契約してもいいよ?』

「はあああゝ! もう尊いつ」

『……ねえ! 聞いている!?』

男の子が眼前に立って可愛らしく拗ねている姿を見て、はっと意識を取り戻す。上目遣いの怒った表情に胸が高鳴り、フラリと倒れそうになるが、ぐつとこらえる。

『僕の事……好きなんでしょう?』

ブンブンと首が千切れるほどに縦に振った。大好きである。主にお顔が尊い。

『なら僕のお願い、聞いてくれるよね?』

「……もちろんです!!」

なぜか嬉しそうな男の子の表情。『契約しようよ』とよく分からない事を言っているが、可愛いからいいかと思ひ、ニヤニヤする口元を隠しながら首を縦に振る。

『名前、頂戴』

「なまえ……?」

言葉の意味を考えていると『早く』と急かされる。愛称をつけてほしいということだろうか? 銀髪の猫っ毛、少し吊り上がった深いブルーの瞳と透き通るような白い肌を見て、ある景色が思い浮かんだ。

「……………メーア。メーアなんて、どうかしら？」

ドイツ語で海を意味する言葉だ。この男の子を見ると、どこまでも広がる綺麗な海を思い出す。リオノーラの提案に、男の子は黙ったままだ。名前が気に入らなかったのかと思いつつも、考え込む尊い顔はしっかりと目に焼き付けていた。

ふと、メーアの手がこちらの方に伸びてくる。その手に恐る恐る指を絡ませた。ひんやりとした体温に驚いて、メーアの手を見つめていた時だった。

『リオノーラ・ダーカー』

名前を呼ばれて顔を上げると、チュツという軽いリップ音と共に、柔らかくて冷たい唇が口元に重なる。

『契約成立だよ』

「……………」

『宜しくね、リオノーラ』

「……………」

『おーい』

あまりの衝撃的な出来事にボカンと口を開いたまま固まる。メーアの言葉が遠くに聞こえた。

(これは夢……………？　じゃあわけえ……………!!)

顔を手のひらで覆い隠したまま倒れ込む。そのままリオノーラはそつと意識を手放した。

「……………お嬢様、お嬢様あ！」

「リオノーラ……………」

うつすらと差し込む光にゆっくりと瞼を開く。シンシアと父と……………綺麗なミルクティー色の髪を靡かせた女性が、心配そうな顔をして立っていた。

(この人を知っているような気がする……………)

その女性は震える手でリオノーラの頬に触れた。

(……………温かい)

なぜか体の節々が痛かった。池の近くにいたはずなのに、玄関近くの部屋のソファに寝かされていて、窓から見える景色は暗くなり始めている。

「……………だれ？」

「……………!!」

リオノーラが問いかけると女性はひどく悲しそうな顔をして、小さく「ごめんなさい」と言った。シンシアの手が背に回りゆっくりと体を起こしてくれる。

「一体、何があったのですか……………？　お嬢様は池の前で倒れていたのですよ？」

「え……………」

その言葉に先ほどの出来事を思い出した。周囲を見回しても、推しにそっくりな男の子の姿はどこにもない。

(……………もしかして、夢？)

ボーッと考え込んでいると、涙ぐむ女性を父が慰めるように優しく抱きしめていた。目を覚ましたばかりの娘より彼女を優先する父親の姿を見て、この女性が誰なのか分かってしまった。

「お、かあさま……？」

声を掛けると、ぴくりと小さく肩を震わせる女性。

（やっぱりそうか……）

この時のリオノーラの記憶の中に母の姿はない。ゲームにも見た目の情報はなかった。それに来なれば、再会するのは一年後の筈だ。

なのになぜ、別邸ではなく本邸にいろのだろうか。もしかしてスフレと本邸に来る予定が早まったのだろうか。

そう思った途端に湧き上がるモヤモヤした嫌な気持ちは元のリオノーラのものだろうか。心が憎しみと悲しみに埋め尽くされていく。

（きっと、リオノーラはスフレにつきつきりだった母親が憎いのね……）

自分へ愛情が向かなかった悔しさと、厳しい教育の苦しみ。一人ぼっちで過ごしていた寂しさと愛情への飢え。リオノーラはその感情を、母親の愛情をもらっていたスフレにぶつけていたのかもされない。そんな事しても満たされないと理解していたとしても止められなかったのだろう。

父は仕事で忙しいと滅多に顔を出さないため、実質リオノーラは、いつもシンシアと二人きりで過ごしている。

会いにきてくれない母親を、想い続けるのは苦しいだろう。ずっと顔を合わせていないのだから

当然だ。

人を貶めたり嫌がらせをしたりするのはよくはないが、恋しかった母親と仲良さげに手を繋ぎ、愛情に満たされた妹を見て、リオノーラはどう思ったのだろう。

そもそも、こうして本邸に来る事が出来るのなら、なぜリオノーラに会うために足を運ばなかったのか……その理由のひとつを『今』のリオノーラは知っていた。

スフレの体の具合と母が本邸に戻らない理由が気になり、シンシアに聞いてみたのだ。初めは渋っていたシンシアも、リオノーラの真剣な表情をみて重たい口を開いてくれた。

母は、義母と義姉に嫌がらせを受けていた。子爵の出であることに嫌味を言われ続けて辛く当たられる日々耐えきれなくなりスフレの病を理由に別邸に逃げたのだ。ちなみにその二人は今日、社交で留守にしている。

リオノーラは、義母と義姉に似ている。だからリオノーラに、母と父は苦手意識を持っているのかもしれない。

（リオノーラはただ、愛してほしかっただけなんだろうけど……）

リオノーラはスフレを責めるべきではなかった。スフレに何をしても満たされないのは当然だろう。

ここまで歪んでしまった原因のひとつは、リオノーラと向き合う事なく、放置して逃げ続けた両親にもないだろうか。

リオノーラの悲しい過去の記憶が波のように押し寄せる。ぐっ、と熱い気持ちが込み上げてくる。

やり場のない悲しみは、このまま胸にしまっていてはいけない気がした。

黙って母を見つめる。父がそっと母の背を押した事で、彼女は気まずそうに口を開いた。

「ごめんなさい……リオノーラ。あなたに会いに来るのが遅くなってしまつて」

今更な謝罪だ、と思つてしまう。

いくら知識やマナーを磨いても、クローゼットいっぱいドレスや煌びやかな宝石を揃えても……両親の愛情はスフレへと向かつていた。

その上、ドレスも宝石も買つてやったのだからと、公爵令嬢としての肩書きゆえの教育を完璧にこなすことと、恥ずかしくないような所作を当然のように求められる。

貴族なら当たり前だと言いながら、スフレには病弱ゆえに何もしていない。リオノーラが喉から手が出るほどに欲していたものを、スフレが全て持つていつてしまった。それでも、ゲームの中のリオノーラは、本当に序盤だけとはいえ、激しい嫉妬と怒りに飲み込まれてしまいそうになるのを必死で抑えていたのだ。元のリオノーラならば母親が会いにきてくれたと、泣いて喜んだらうか。それとも我儘を言つて困らせたのだらうか。転生した理由が、ゲームで火炙りにされたリオノーラの後悔と無念を果たすためだとしたのなら、そんな彼女のために何が出来るだらう。

今、気持ちを吐き出してしまふ事でリオノーラの悲しみを癒せるのかは分からないが、きつと未来は変わるだらう。

全力でリオノーラの不満と悲しみをぶつけてみようと思つて決意する。

「……なぜ、あなたが泣くのですか？」

その言葉にアーリンは怯えたように目を見開いた。リオノーラは自らを落着かせるように深呼吸をしてからフーッと小さく息を吐き出す。

「スフレの具合はいかがですか？」

「え……ああ、だいぶよくなつたわ」

「元気になつたのですね」

「二年ほど前から元気に庭を飛び回っているわ」

一瞬、怪訝な顔をしたアーリンだったが、嬉しそうにスフレの事を話し始めた。それからスフレの事をいくつか質問するとすぐに答えてくれる。やはりスフレは可愛くて、愛すべき存在なのだらう。

「それに最近ドレスが好きで、お洒落もしたいって言つていてね」

「そうですか……」

「とても可愛いよ！ リオノーラにも早く会わせたいわ」

いくら待つても、いくら話を聞いても、母の口からリオノーラのことを聞く言葉が出る事はなかった。「リオノーラはどうしていたの」と一言言ってくればそれで良かったのに。仕方なく重い口を開いた。

「お母様は、どうしてわたくしに会いに来てくださらなかったのですか？」

「……!?」

問いかけると、一瞬で笑顔が凍りつく。それから口元を押さえて体を固くしていた。両親の事情

は今のリオノーラがシンシアに聞くまで知らなかった。両親には何も知らないと思われる事だろう。

意地悪な質問だが、どう答えるのか……リオノーラに誠実に向き合ってくれるのか興味があった。しかし、母から答えはない。ため息をついて言葉を続ける。

「わたくしの事には、あまり興味がないようでしたので」

「……そ、そんな事は」

「リオノーラッ！」

父が間に入り、母を庇^{かば}うように立ち塞がる。

（とんだ茶番ね……）

「なんですか、お父様？」

「アーリンは、ずっとお前に会いたがっていたんだ……！」

「でも会いにきていないわ、一度も」

「それは……」

「数年前には何度も何度も手紙を書きました。一度も返事はもらえませんでしたけど」

「……手紙？」

「わたくしは……お父様とお母様に嫌われているのですか？」

母は緩く首を横に振り、父は「何を……」と戸惑う様子を見せた。

「わたくしは、毎年一人で誕生日を過ごしています。側にあるのは山のようなプレゼントだけ」

「……リオノーラ、それはッ」

「お仕事が忙しい、でしょう？　ですがスフレは毎年お父様とお母様と祝っているのだと、前に勤めていた侍女がわたくしに教えてくれた事がありました」

「あ……………」

「……っ」

我儘なリオノーラに当てつけでもするかのように侍女達もリオノーラを苦しめようとしていた。

お前は愛されていない、妹は両親に愛されているとも言いたいように。

「スフレはお二人にとって大切な家族ですから毎年祝うのですよね？　でしたらわたくしの家族はシンシアだけですわ。だってシンシアはわたくしの誕生日を毎年祝ってくれますもの」

「だ、だがアーリンもお前の事を思っ……」

「それがなんだと言うんですか？　それに今まで一度も会いにきていないのであれば同じですわ。今日は来られるのに、スフレが生まれてから八年間、わたくしに会えなかったのはなぜですか？」

「違う……アーリンはッ」

『アーリンは、アーリンは……』その言葉に溜息を吐く事しか出来なかった。

母の苦しさを身近で見ている父は、母の心を守ろうと必死なのだろう。しかしそれならリオノーラの心は一体、誰が守ってくれるのだろうか。こんな気持ちで一年後に、仲睦まじい三人を見て、リオノーラがニコニコと笑っている事など出来るのだろうか。リオノーラが我慢すれば全て丸く収まるのだろうか。深い憎しみと歪な悲しみを抱えたまま一生耐える事など不可能だ。

(だったら……いつその事、今遠ざけた方が楽かしら)

「もう一度聞きます。どうして、お母様はわたくしには会いに来てくださらなかったのですか？
なぜ、手紙すらくれなかったのですか？」

「……………リオノーラ」

「何か理由が……？」

「……ッ」

「それは……」

続く言葉待ったが、やはり母は何も話さない。

「答えてくだらないのなら、わたくしからはもう何も話す事はありません……失礼します」
母に代わるかのように父が怒鳴る。

「待ちなさい、リオノーラッ！」

「……まだ何か？」

「母親が会いにきたのだぞ!？」

「……………」

「それだけ、なのか!？」

「わざわざ、わたくしに会いにきたのだから泣いて喜べと……？」

平然と答える様子に絶句している両親の姿を見て、クスリと微笑んだ。

(今の笑い方はとても悪役令嬢っぽいわね)

そんな呑気な事を考えながらも、滑稽だと、そう思ってしまったのだ。自分達は無条件に受け入れられる、そう信じて疑わないのだろう。けれど今のリオノーラにとって、それはありえない。

「なんて事を……」

「だって、そう聞こえますもの」

「……………ずっとシンシアや母に任せきりで、寂くさせてすまなかったと、私もアーリンもそう思っている」
それを聞いて、わざとらしく首を傾げた。

「お父様は変な事を言うのね……？ 別邸のスフレには毎日のように会いに行けるのに『一緒に住んでいる』わたくしとは顔を合わせられないなんておかしいと思いませんか？」

子供は親の行動をよく見ているもので、リオノーラはかなり前から、父が、よく別邸で寝泊まりしている事を知っていた。父が本当の意味で『一緒に住んでいる』のはスフレと母だ。そしてリオノーラは自分が選ばれない悔しさと、どうしようも出来なかった現実に恨みを募らせて愛に飢えたのだ。

母は怯えた様子でこちらを見ているが、リオノーラに祖母と伯母の姿を重ねて見ているのだろうか。確かにリオノーラはダーカー家の色や性格を濃く受け継いでいる。祖母は勝気で伝統と血筋を重んじる貴族らしい人だ。だから父は母の優しく儂い雰囲気には惹かれたのだろう。

リオノーラが生まれた時も、なぜ男児を産まないのかと、母は強く責め立てられたそうだ。そして次に生まれたスフレの時はもっとひどかったらしい。男児ではないことに加えて体が弱かったか

らだろう。母はついに心を病んで逃げるように別邸に行った。

（でも逃げる事も許されずに、誰にも助けてもらったリオノーラは……？）

不満をぶつける以前の問題だった。これ以上、話す事もない。

「もう、部屋に戻ってもいいでしょうか？」

「折角、アーリンが……！」

「そうですね。スフレの近況が聞けて嬉しかったです。では、またいつかお会いしましょう。お

母様」

「……あ」

「お前は、なんでそんなに我儘なんだ……っ！」

「……………我儘？」

「我儘ばかり言って周りを困らせて、いい加減にしろッ！ 何もッ、何も知らないくせに、お前はっ！」

「ですが、わたくしは何も聞いておりませんもの。それで何を分かれたいのですか？」

「な、に……？」

「わたくしは、何も知りません。お父様はわたくしをどう思っていたのですか？」

「私は常にお前の事を考えて動いていた！ 言う通りにしていたじゃないか」

「そうではありません」

「ならなんだというんだ!? 私はすべて把握している……！ リオノーラ、お前のことも何だっ

知っている!! ずっと一緒にいたからな。知っているから与えられていたのだ」

その言葉にギョッと掌を握り込む。

大量の講師をつけて性格を歪める原因を作ったのは、リオノーラの祖母のエルサナのせいだろう。

常に聞かされ続ける母やスフレの悪口。王家に嫁ぐためには、ダーカー公爵家の者ならば……と、

半ば洗脳のような形で支配されていた。それを見て父は、リオノーラは祖母似だと思っただろう。

ドレスや靴、宝石をプレゼントして装飾品で寂しさを埋めるようになったのも、美や血筋に執着

する伯母のターニャに強く影響を受けたものだろう。それを見て父は、伯母似だと思った。

厳しい躾と過剰な褒美で、リオノーラは徐々に壊れていく。しかし、それを間近で見えぬふり

をしていたのは、紛れもなく父自身だろう。父はリオノーラの表面しか知らない。

（リオノーラを犠牲にして二人を守っている事に気づいていないのね。お父様にとつては、ただの

我儘な娘……）

もっとも、その事を理解してくれる日は、きっとこないのだろう。こうして今もリオノーラを責め続けている。我儘を許したのは、罪悪感からか罪滅ぼしか……はたまた面倒だったのかは知るよしもない。

しかしリオノーラと会話もせずに、一体何を知る事が出来るというのだろう。

どうにかリオノーラの気持ちに気づいてほしい……縋（すが）るような思いで口を開いた。

「それではお父様、わたくしの好きな色は？ 食べ物？ 最近読んだ本は……？」

「そ、それは……」

馬鹿みたいだ。好きな色くらい、ねだったドレスの色から適当に答えてもいいだろうに、それすら覚えていないなんて。

「何も答えられないんですね。ずっと一緒にいるのに……では、わたくしが我儘になった原因は一体何でしょうか」

「我儘になった原因、だと……？」

ただ二人は哑然としている。リオノーラが何を言いたいのか、意味が分からないといった様子だった。

「わたくしは、お父様とお母様の事を何も知らないわ。ずっと一人で過ごしているもの」

「だから今……っ」

「けれどお父様はわたくしの事なら何でも知っているのですよね？ では、どうしてわたくしは……こんな風に育ってしまったのでしょうか？ 教えてくださいませ、お父様」

——バシンッ！

重たい痛みを頬に感じた。平手打ちをされたと気づいた時には、その衝撃で地面に倒れ込んでいた。

「ふざけるな……っ！」

「やめてッ！ ジョンテ……もうやめてえ！」

ギュッと唇を噛んだ。

（やっぱり……簡単には分かってはもらえないわね）

今まで父を困らせてばかりいた。しかしそれがリオノーラが知る唯一の関わり方だったのだ。切ない気持ちをグッと抑え込んだ。ゆっくりと体を起こす。シンシアが慌ててリオノーラの側に駆け寄った。

母は涙を流しながらも必死に父を止めようとしているが、怒りに体を震わせていた父の耳には届いていなかった。

「何も知らないのは、わたくしだって同じなのに……」

「このっ……！」

「旦那様……おやめくださいッ！」

シンシアが怯えながらもリオノーラを庇うように前に立つ。リオノーラを必死に守ろうとするシンシアの体は小さく震えていた。

雇い主である父の前に立ち塞がるという事は仕事をクビになっても文句は言えないという事だ。そもそも、小柄なシンシアが激昂した男性の前に立つというだけで恐ろしいだろう。けれど、リオノーラを守るために体を張って立っている。

（まるで、本当の母親みたい……）

それが『リオノーラ』にとっては、どれだけ嬉しい事か。先ほどまで怒りでいっぱいだった心に光が差し込んだ。鼻水を吸（すす）り、シンシアにも手をあげそうな父に向かって、かつてのリオノーラの気持ちを代弁するように大声で言い放つ。

「……シンシアだけがわたくしの家族よッ！ わたくしは殴ってもいい。でもシンシアだけは絶対

にダメ！」

唇を噛み締めて、頬を真っ赤に腫らしたままシンシアを庇うように前に出た。

（最後まで泣いてやるものか……！）

屋敷を追いつけられなかった。庶民として十分に暮らしていける知識を今ならば持っている。もしも、リオノーラが可愛らしく「お母様、会いに来てくれて嬉しい」と言えたのなら、母と父はリオノーラを褒めて、愛してくれただろうか？　しかし根本的には何も変わらないだろう。そんな都合のいい愛情を与えてもらう必要はない。

子供が必死に叫び侍女を守ろうとする姿で我に返ったのか、父の腕が力なく下がる。手を止めた父を見て、シンシアの手を取り背を向ける。

「ま、まだ話は終わってないぞ！　リオノーラッ」

「ごめん、なさい……！　ううっ」

父の怒鳴り声と母の悲痛な叫び声だけが響いていた。

やってしまった……いや、やり過ぎてしまったと言わなければならないか。シンシアと手を繋ぎながら歩いている途中、ふと、足を止めてシンシアを見上げた。

「シンシア、大丈夫……？」

「お嬢様を守ってくださいましたから、わたしは大丈夫ですよ」

シンシアは、嬉しそうに笑っていた。その笑顔を見ていると、なぜか涙が込み上げてくる。きつ

と彼女がいなかったら、もっと早くにリオノーラは壊れてしまっていただろう。

「ねえ、シンシア……聞いても良いかしら」

「……はい、何でしょうか？」

シンシアは立ち止まって膝を折り、リオノーラと視線を合わせる。リオノーラの顔を改めて見た彼女は、リオノーラが涙を浮かべていることに気づいて涙を拭き、腫れた頬を優しく押さえた。

「わたくしの好きな色は……？　好きな食べ物は何？」

「お嬢様は、銀色が好きです。最近はまだ丸の白いパン、玉ねぎがたっぷり入ったスープ、それにチョコレートケーキがお気に入りです」

「……っ、わたくしがよく読める本は？」

「精霊と旅に出る『虹の花』がお気に入りかと……あつてますか？」

シンシアは少し自信なさげに首を傾げた。最近好きになった……毎日リオノーラを気にかけていないと出てこない答えだ。

「全て、正解よ」

「それは……よかったです」

「ありがとうございます、シンシア……ッ！」

「当たり前です。ずっとお嬢様のお側にいるのですから」

シンシアはそう言って、静かに涙を流して震えるリオノーラの体を包み込むように抱きしめてくれた。リオノーラの行き場のない悲しみが溢れ出して、涙が止まらなくなった。温もりに甘えて、

思いきり泣いた。泣く事すら許されなかったかつてのリオノーラの無念が、感情が、波のように流れ込んでくる。

「うわあああ……!!」

今までリオノーラの奥底に溜まっていた真つ黒な悲しみや悔しさが、さらさらと流れていくのを感じていた。胸の中が、熱くて苦しくて切なくて、今まで壊れそうだった心が悲鳴をあげているのだと、そう思った。声が出なくなるまで泣き叫んだあとに、シンシアに連れられてまた歩き出す。この温もりだけがあればいいと思ったから、両親がその後どうしたかなんて、気づかなかった。

次の日、顔が風船のように真つ赤に腫れていた。頬もそうだが、泣き腫らした目蓋はもつとひどかった。涙と共に心につつかえていたモノが取れて、妙にスッキリとした気分だった。父におもねる気持ちも綺麗さっぱり消えたため、顔の腫れを理由に部屋に引きこもる。

けれど二日ほど部屋にいと流石に飽きてくる。ふと、ゾイに会いたくて堪^{たま}らなくなり、シンシアに声を掛けた。

「シンシア、ゾイ様にこの間、ドレスを選んでいただいたお礼をしたいのだけど何がいいかしら」お礼をしたくても、今の状態では何かを買う事も出来ないだろう。父と顔を合わせないのであれば、リオノーラの出来る事は限られてくる。

「そうですね……お花やお手紙、お菓子などはいかがでしょうか？」

「シンシア、さすがだわ! さあ行きましょう」

「今から行くのですか!？」

「もちろんよ」

「あつ……! お嬢様、待つてください」

庭師と共に花を摘んで手作りのクッキーを持って馬車に乗り込み、メゾン・ヴィーナスへと向かった。今すぐに行かなければいけない、誰かに呼ばれているようなそんな気がした。

「あら、珍しいお客様ね。いらつしゃい……通して頂戴」

二階で優雅に紅茶を飲んでいたゾイは、店員に目配せする。店員に案内されるがまま、向かい側の椅子を引いた。手を借りながら少し高い椅子に腰掛ける。

「ドレス、とっても似合ってるわ」

「ありがとうございます! ゾイ様、急に押し掛けて申し訳ありません。どうしてもゾイ様に会いたくなってしまう……」

「ふふつ、いいのよ。たまたまここにいてよかったわ。今日はジョンテと一緒にではないのね」

「ええ、お父様は……」

わたくしの顔は見たくないでしょうから……そう続けようとしたが口をキュッと閉じる。避けているので当たり前だが顔を合わせる事はない。あのあと話をする機会もその気もなかった。話を逸^そらすように、持ってきたクッキーと花をゾイに渡した。

「これ……この間ドレスを選んでいただいたお礼です」

「まあ……!」

「ダーカー家の料理人に手伝ってもらって一生懸命作りました。お口に合うかは分かりませんが食べてください。それと花を……」

「いただきわ。とても素敵ね」

ゾイの側にいる侍女達が、持ってきたクッキーを綺麗にお皿に並べ、花瓶に花を飾ってテーブルに置く。色とりどりの花とクッキーが置かれた白いテーブルは一気に華やかになる。

「リオノーラ、アーリンとは……母親とは会えた？」

「え……？」

ゾイは和やかに笑っていた。何故ここで母の名前が出るのか疑問に思ったが、以前この店に来た時に母の名前を口に出していた事を思い出す。急に母がリオノーラを訪ねてきた理由は、もしかするとゾイが何かを伝えてくれたからかもしれない。しかしそんな気遣いも、あんな形で終わってしまった。暗い表情を浮かべていると、ゾイはカップを置いて心配そうに見ていた。

「リオノーラ……？」

「お母様とは顔も忘れてしまうほどに、久しぶりに顔を合わせたのですが、妹の話を楽しそうにしておりました。わたくしの事は、あまり好きではないのでしょうか……怯えているように見えませんでした」

「……！」

「今まで手紙の返事も来なかったし、一度も会いに来てくれませんでしたから。何か理由があったのだと思います、話してはくれませんでした」

「……リオノーラ」

「それを聞くとうとしてみたのに、お父様にも怒られてしまいました」

「リオノーラ、それは……」

「よくよく考えてみたら、お父様とのお出掛けは、この店でお買い物した時が初めてだったんです。妹は……わたくしと違って、お母様やお父様と楽しく過ごしていたのかと思うと、少し羨ましいです」

ゾイは何かを言いかけたが、静かに話を傾けてくれた。この気持ちはリオノーラのものなのか、莉子のものなのかはよく分からない。ここ数日で、莉子とリオノーラは別の存在ではなく、一緒にあって混じり合ったような気がしていた。

「お父様とお母様には内緒にしておいてください」

「……。ええ、約束するわ」

「申し訳ありません。こんな話を……」

「いいのよ。それよりもリオノーラは大丈夫？」

「はい。シンシアが側にいてくれますので……」

「シンシア……？」

「ずっと我儘だったわたくしを見捨てないで側にいてくれた侍女です。わたくしの、たった一人の家族なんです。そんなシンシアのためにも心を入れ替えようと思いました」

ゾイは紅茶を置き、そっと立ち上がって側まで歩くと、視線を合わすようにしてゆつくりと屈

んだ。

「ゾイ様……？」

「……………ごめんなさい。余計な事をして、あなたの心を乱してしまったわ」

「いいえ、遅かれ早かれ同じ事です……いつかはこうなっていました」

結果、上手くはいかなかったが、これ以上、家族に振り回されずに生きていく事が出来るかもしれない。たとえ家族から距離を置かれたとしても、愛情を求め続けて苦悩しながら生きていくよりマシだろう。

（今日ここに来る事が出来て、本当によかった……）

ゾイに優しく抱き締められて、温かな体温を感じながら目を閉じた。

「お母様に抱き締められたら、こんな気持ちになるのかもしれませんが。ゾイ様、ありがとうございます」

ゾイは黙ってリオノーラを抱きしめていたが、しばらくしてふと呟く。

「私も最近、あの子達を抱きしめてないわ」

「ゾイ様には、お子様が？」

「ええ、みんな男の子なの。三人もいるのよ？」

「賑やかですね」

ゾイは嬉しそうに微笑んでいる。きつと、とても素敵な子供達なのだろう。

「ええ……でもドレスを着せられなくて残念だわ」

「こんなに素敵なドレスを作れるのにもったいない気がしますね」

ゾイは頭を優しく撫でてくれた。安心感に笑みが溢れる。その瞬間、ゾイが何かに気づいた顔で手を止めた。そのまま目をみはるゾイに首を傾げる。

「……ゾイ様？」

「やっぱりそうだわ。リオノーラ、あなたまさか……！」

「え……？」

真剣な顔をしてこちらを見ているゾイに首を傾げた。リオノーラに問いかけようと立ち上がった瞬間、バタンツと大きな音が一階からした。ゾイがそちらに向かう。

「——リオノーラッ！ここにリオノーラはいるか!？」

「ジョンテ……店を大声を出さないで」

「リオノーラが邸からいなくなってしまったんだ……！何か知らないか!？」

焦る父の姿を見て気がついたことがある。思いつきと勢いだけでここまで来たので、誰にも行き先を伝えていなかったのだ。唯一、居場所を知るシンシアも、リオノーラにずっと付き添っていたため、行き先を知る人物は屋敷にはいなかった。

「お、お父様……」

二階から恐る恐る顔を出した。目を見開いた父が、怒鳴りながら階段を上がってくる。

「お前は何をしているんだ！どれだけ周りに迷惑を掛けたと思ってるんだ!! いい加減にしろッ」

「……申し訳、ございません」

「無断で出掛けるなど……！ 何かあったらどうするんだ。護衛も付けずに！」

素直に謝罪の言葉を口にして頭を下げる事しか出来なかった。無断で出掛けたのは明らかに非があったからだ。執事や侍女に一言でも声を掛けていたら、こんな事にはならなかったかもしれない。「そんなにドレスがほしいのかっ!? もうたくさん買ってやっただろう」

「違います。わたくしは……」

「いつも我儘を言って私を困らせてばかり！ スフレは……スフレは、あんなにも良い子だというのにお前はっ!!」

その言葉を聞いて目を見開いた。視界がにじむ。しかし頭に血が上り、怒っている今の父が気づく事はないだろう。それに今はゾイの前だ。父の気が収まるまで、ただひたすら耐えるしかない。そう思っ黙っている、横からヒールの音が聞こえた。ゆっくりと顔を上げる。

「もうやめて頂戴。これ以上、リオノーラを傷つけないで」

ゾイがリオノーラを庇うように前に立っていた。怒りの竦^{こも}った声に驚く。

「……ゾイ」

「あなたがリオノーラを心配している事は分かったわ。でも、少し言い過ぎじゃないのかしら？」

「しかし……！」

ゾイは綺麗な刺繍^{はしこ}が施されたハンカチを差し出してくれた。軽く頭を下げて会釈してからハンカチを受け取った。その氣遣いが、今は有り難い。

「リオノーラの話、どうして聞こうとしないの？」

「……だがっ！」

「確かに行き先を言わずに出掛けたリオノーラに非があるのかもしれない。けれど、間違いや過^{あやま}ちなんて誰にでもある事。子供ならば尚更よ」

「……！」

「それにドレスがほしい子供が親も連れずに、一人で店に来るかしら？」

「……そ、それは」

「話も聞かずに、我儘だと決めつけるのは早計すぎるのではなくて？」

「……………!?」

「心配だったのなら、そう伝えればいい。次から気をつけるように諭してあげたらいい。けれど妹と比べてリオノーラを咎^{とが}めるのは違うのではないかしら？」

ゾイの言葉に喉の奥から熱いものが込み上げてくる。そして気持ちを理解してくれた事が、何よりも嬉しかったのかもしれない。下を向きながら誰にもバレないように、そっとハンカチで涙を拭^{ぬぐ}った。

「すまない……」

「謝るのは私にはないはずよ。あとリオノーラのために言っておくけど、私にこの間のお礼をしたいとわざわざ尋ねてきてくれたのよ」

「……本当か、リオノーラ」

「……。はい」

小さく頷くと、気まずそうに逸らされる視線。

「リオノーラは、ちゃんと否定をしていたわ。謝罪もね。あなたは聞いていなかったようにだけ……」

「……………」

「……それから、リオノーラは、しばらく私達が預かりたいのだけれど、いいかしら？」

「なっ……!? どういう事だ」

ゾイは急遽、書類を用意するように従者に頼んでいた。突然の事にどうすればいいか分からずにリオノーラは成り行きを見守っていた。

「申し訳ないけれど、今のダーカー家にリオノーラをこれ以上置いておけないわ。危険なもの」

「ゾイ、勝手に決めるな!」

「いいえ、これは義務よ。リオノーラはリーベなの」

「リオノーラがリーベだと!? そんなわけないだろう……!」

「確認したのよ。リオノーラは間違いなくリーベだわ」

『リーベ』という聞き覚えのない言葉に首を傾げた。

ゾイはどうしてリオノーラを預かると言ったのだろうか。それにダーカー家にいると危険というのはなぜだろうか。混乱するリオノーラにゾイは優しく言った。

「精霊に愛された者を『リーベ』と、そう呼ぶのよ」

正確には、『リーベ』とは精霊と契約した人間を指す言葉だった。

この国には不思議な力があって、それは全て精霊によるものだという事は知っていた。リーベの意味は分かったが、なぜリオノーラがリーベであると判断されたのだろうか……謎は深まるばかりである。

「リオノーラには、強い力が宿っているわ」

「……………」

父の焦ったような視線を感じていた。リオノーラがリーベだと何か都合が悪いのだろうか。そう考えていると……

「……リオノーラは、どうしたいんだ」

「え……………」

突然、父に問われて戸惑ってしまふ。

「リオノーラのためにアーリンとスフレが本邸に戻って来るんだ。これから四人で仲良く暮らせる。今年からリオノーラの誕生日も一緒に祝い出来るぞ!」

「……………」

「ちよつと、ジョンテ! 今、リオノーラにいい感情を持たれていないあなた達が一緒に暮らせば、どうなるか分かるでしょう!? それにリーベだと分かった時点ですばらく一緒に暮らすのは無理よ……………」

「まだリーベかどうかは分からないだろう……!? 現にリオノーラは精霊を認識していないじゃないか」

「……分かるのよ、同じリーベには。それに精霊の力が強ければ強いほどリーベが傷付くと怒ったり、嫌だと思うものを壊したり……感情に引き摺られて暴れ出す事だってあるわ！ 適切な環境で正しい力を身につけるために訓練しなければならぬのよ」

精霊は強くなるほど力を制御する事が難いらしく、リーベになった時点で訓練を受けなければならない。早ければすぐに家に帰る事も出来るし、精霊との関係性によっては家から通う事も出来るそうだ。

悲しい事故が起こるのを防ぐため、また、精霊とより良い関係を築くためには必要なことらしい。子供にはリーベの存在を、なるべく教えないようにしているのだという。

「リオノーラの場合は早めに手を打った方がいいと思うの。とても強い力を感じるから」

「だが、このままじゃいけないとアーリンと話し合って決めたんだ！ それに屋敷からでも通える距離だろう？」

「一緒に暮らしながら通う事も出来なくはないけれど……相当危険よ？ あなたが思ってるよりも。その覚悟が貴方にあるの？ アーリンやリオノーラの妹が傷付いたら、あなたは今みたいにリオノーラを責めないと言いきれるの？」

「……っ」

「今までのやり取りを見ている限りだと、とても無理そうね。少し離れてリオノーラの気持ちをキチンと考えてあげたらどうかしら？」

「そんな事、分かてるっ！」

「……ジョンテ」

「リオノーラ、聞いてくれ。これからはもう一人じゃないんだ！ 家族として、もう一度やり直そう」

仲良く暮らせる。誕生日をお祝いしてくれる。もう一人じゃない。すべて以前のリオノーラが欲していたものだ。そして手に入れられなかったもの。それが今、目の前にあるというのに心から喜べないのは何故だろう。

父がこの間の事をどう思ったのかは分からない。

もしかしたら、リオノーラの事を考えて家族で過ごす時間を作ろうとしてくれているのかもしれない。父なりに考えて、必死に道を模索してくれたのかもしれない。

けれど、不思議と嬉しい気持ちはなかった。それがリオノーラを想って言ってくれた言葉だとしてもだ。今更、母とスフレが戻ってきたとして、二人の幸せな姿を見て恨まずにいられるだろうか。スツと心が冷えていくのを感じていた。

「……もう、何もいらぬわ」

冷たい声が口から漏れ出た。新しい道が示された今、あれだけ欲していた愛情に、なんの魅力も感じなくなってしまった。

「ゾイ様の元に行けば、もうお父様を困らせる事もないでしょう。今までわたくしのせいで色々にご迷惑を掛けて申し訳ありませんでした」

「リオノーラ、違うんだ！ そういう事を言いたくないじゃない」

「お父様とお母様は、良い子なスフレを可愛がってください……わたくしの事はもういいですから」

そう言つて、につこりと笑つてみせた。少しくらい嫌味を言つても許されるだろうか。今、家族への期待は残つていない。涙と共に流れ出て行つてしまった。

それに、もう期待する事に疲れてしまった。アーリンとスフレは血の繋がりはあるが、ほとんど赤の他人状態である。

今の家族と無理をして心を殺して過ぐすより、家族と離れた方が楽しく暮らせるような気がした。「私はゾイ様の元へ行きたいです！」

疑問はたくさんあるし、不安がないかといえは嘘になる。けれど、ゾイと共に行く事を選びたい。この先、公爵家に帰れるかどうかは、リオノーラ自身と契約した精霊次第だと書類と共に説明を受けた。ゾイに促^{うなが}されながら父は震える手で書類にサインした。

「ゾイ様……シンシアと一緒に連れて行つてもいいのでしょうか？」

「ええ、侍女は一人だけ連れて行つても大丈夫よ」

「……シンシア、いいかしら？」

「もちろんですよ、お嬢様」

ホッと胸を撫で下ろした。シンシアが側にいてくれるならば安心である。

ゾイに深々と頭を下げて、公爵家の馬車に乗り込んだ。帰る際も父とは一言も言葉を交わす事はなかった。

なぜか暗い顔をしていたが、我儘なリオノーラが去るのを喜ばなかったのは意外だった。リオノーラがいなくなれば三人で仲良く過ごせる筈なのに。

（まさか本当に家族として、やり直そうと思つていたとかかしら……）

何も言わない父の胸の内を知る事は出来なかった。重苦しい空気に窓の外をずっと見ていた。馬車を降りる時、その場から動こうとしない父に声を掛ける。

「お父様、スフレとお母様と幸せに暮らしてくださいね」

「……………ッ」

「では、行つて参ります」

今から一度家に戻るが、父とは今を別れとするつもりでそう言つた。一度も後ろを振り返らなかった。この先の事を考えると心が躍った。

シンシアと共に荷物をまとめる。リオノーラにとって大事なものなど、この屋敷にはほとんどない。

（ヴィーナスのドレスと靴、それだけを持って行こう……！）

心はとても晴れやかだった。カバンを持って立ち上がった。

——次の日の朝、迎える馬車に揺られて辿^{たど}りついた場所に二人であんぐりと口を開いていた。

（王城……!? ここ王城よね？）

何度見ても王城である。城を見上げて啞然としていると、馬車は走り出してしまった。どうやら